令和４年度　多摩市文化芸術ビジョン検討委員会　第４回　要点録

開催日時・場所	令和５年３月２２日(水)　18：00～20：20　多摩市役所３０１会議室	
参加委員	参加委員７名 学識経験者：伊藤裕夫氏 市民委員：石坂氏、岩佐氏、柴田氏、新倉氏、西村氏、渡辺氏 その他　傍聴１名	
出席職員	くらしと文化部長、文化・生涯学習推進課長、文化施策担当課長、事務局３名	
主な内容	開会	資料の確認
	次第１	前回の振り返り
	次第２	アンケート実施報告について
	次第３	ワークショップ実施報告について
	次第４	（仮称）多摩市文化芸術将来ビジョン 2035 について
	次第５	第５回委員会について
議題	主な意見（●事務局、◎委員長、〇委員）	
次第１ 前回の振り返り	①前回の要点録について確認。委員会として承認した。 ②前回委員会の内容の振り返り	
次第２ アンケート実施報告について	●資料１６「アンケート実施報告書」、資料１７「アンケート結果　まとめ」を説明 【アンケート調査の概要】 ① 回答数 １９４名（内 ＷＥＢ回答１７９名／紙アンケート回答１５名） ② 調査期間 令和５年１月２０日～２月２０日 ③ 調査方法 URL、QR コードによるＷＥＢの回答専用フォームまたは公共施設（市役所本庁舎、永山・関戸各公民館、市民活動・交流センター、多摩市立複合文化施設）５か所におけるアンケート用紙設置にて回答を依頼 ◎　アンケート実施前は、回答数が１００程度と予想していたが、結果は倍近くの１９４名であった。ＷＥＢ回答を中心に行ったことが良い結果に繋がったと思われる。 　３０代、４０代を中心に、文化芸術関連団体に加入していない層が多いことを考慮すると、文化芸術に精通していない一般の方からの回答が得られたと考えられる。そういった意味では、広く市民の意見として、アンケート結果が参考になる。 　文化芸術の鑑賞場所を「市外」と答えた方が多く、今後は「市内」で文化芸術鑑賞をしてもらうためにはどうしたらいいのか、考えていく必要性を示している。 〇　アンケート結果の市民の声を見て、改めて将来ビジョンを検討していく責任を感じた。 　まずは、自分の中にしっかりとした将来ビジョンがなければならないと感じ、文化芸術の情報が一カ所に集約されたツールがあると良いと考え、文化芸術マップの仮サイトを作って考察してみた。 　年代別で検索が可能なページ、応援や寄付ができるページ、文化芸術活動を行いたい人のためのページ、鑑賞したい人が検索するページ、マップ上で文化芸術活動を検索することが可能であるページなどを想定した。 　実際にやってみて気づいたが、今話したものであればすぐにでもできてしまうツールで、将来ビジョンは１０年後を見据えるものである。過去の反省と	

次第２ アンケート実施報告について	現在という点と点を結んだ上で、さらなる未来を考えないと難しいと思った。 　アンケート結果は様々な意見があった。時代が変化し、多様化が求められている。文化芸術に求められていることは、しなやかな対応である。 　アーティストが多摩市に移り住んだときに、活動を応援されているとはっきり認識できる街が理想だ。 ◎　作られたホームページ自体を将来ビジョンに反映することは難しいが、情報収集や発信という視点でホームページを活用した取り組みは今後検討していく必要がある。
次第３ ワークショップ実施報告について	●資料１８「ワークショップ実施報告書」、資料 19「ワークショップ結果　まとめ」を説明 【ワークショップの概要】 日 時：令和５年２月１８日（土）14：00～16：10 場 所：パルテノン多摩会議室３・４ 参加者：一般参加者 １８名 ○　グループ発表で、静かすぎるとの意見もあった。情熱をもって取り組んでいくこととともつながるが、イベントが少ないという趣旨もあったのではないか。発表者が若い人だったが、子ども向けのイベントだけではなく、若者向けのイベントや発表の場を日常的に作っていくことが大事であると感じた。 ○　多摩市は大衆的に向けた娯楽が不足している。グループ発表の内容は、普段から仲間内で話している内容と似ており、そこが印象的であった。 ○　多摩センターは賑わってはいるが、市外の人が来て賑わっており、市民が賑わっている印象が少ない。 ○　多摩センターはサンリオピューロランドがあるため、市外からの入園者で賑わっている印象がある。 　多摩センターの大通りで、大道芸が技を披露して人が集まっている時もあるが、地元の人々が参加しているわけでもなさそうで、そこが残念に思う。
次第４ （仮称）多摩市文化芸術将来ビジョン 2035 について	●資料２０「（仮称）多摩市文化芸術将来ビジョン 2035」を説明 ≪１・２ページについて≫ ○　将来ビジョンは、「はじめに」という見出しで始まり、多摩市みんなの文化芸術条例を施行した説明が最初にくる。親しみにくい内容であり、市民が続きを読み進めてくれるか不安がある。 　まずは、なぜ条例を施行し、将来ビジョンを作ったのかを知ってもらうために、「文化芸術のもつ力」で説明している文化芸術の大切さを最初にもってきた方が良いのではないか。 ○　「２　文化芸術を取り巻く環境」の文案２行目において、「人々の集まる劇場や会場等の固定の場所だけでなく」の後ろに、「街中や公園など自然の中で、また」を入れ、その後に「インターネットを利用し」と続けた方が良い。ワークショップで「街中で音楽が響き渡る」という意見も出ており、補った方

次第４ （仮称）多摩市文化芸術将来ビジョン2035について	が良いと考える。 　また、「３　文化芸術のもつ力」がきれいにまとまりすぎており、なぜ多摩市で文化芸術が必要なのかを伝えた方が良いのではないか。 ◎　前回の第３回検討委員会で、文化芸術の力について意見があった。前回は「生きるための活力」や「心の拠り所」としての意見と、「一流・本物の文化芸術に触れる」という意見であった。この２つは一見逆に見えるが、文化芸術の両輪として。その意味をどこかで表現することも良いと考える。 　文化芸術は、社会に覆われた暗さを明るくし、人々を元気にする力がある。もっとパンチのある表現で多摩市らしさを出していくため、表現を工夫する必要がある。次回以降も議論をしていきたい。 ○　委員会が目指していることは、文化芸術を盛り上げることを手段として、その先にある生きがいや喜びを分かち合える住みやすい街、人々がのびのびと生き生きとしていることが文化芸術の大きな機能である。そういったことを冒頭にもっていきたい。 　また、文章を短く、簡易な言葉で表現したい。たとえば、「３　文化芸術のもつ力」の１行目「文化芸術は、私たちの心に潤いと安らぎをもたらしてくれます。」と区切る。次に「創造」という言葉が繋がるが、「想像」というイマジネーションの方も加えてよいかもしれない。文化芸術を鑑賞した時、表現者がどれくらいの練習を重ね、どれだけ多くの人が関わり、時間や労力をかけて出来上がったものかを想像することができると、それが大きな感動につながる。わかりやすく、想いのこもった表現にしたい。 　「３　文化芸術のもつ力」を１の最初にもっていき、表現を簡易で日常的に使うわかりやすい言葉にしていきたい。 <u>≪３・４ページについて≫</u> ◎　通常、将来ビジョンは１ページ、多くても２ページで表現されることが多い。文化芸術の振興にあたり、どのような街にしたいのか、生活にしたいのかを定め、それを実現するために計画を実施していくという考えは大切である。 　多摩市は、将来ビジョンについて、時間をかけて具体的に表現しようとしている。 ○　将来ビジョンについて、「こうなったらいいよね」という検討はできるが、その理想イメージが実現可能かどうかについての判断はどうするのか。例えば、お金はどのくらいかかりどこから調達するのか、どれくらいの規模で考えればいいのか、どれくらい現実を意識して考えていくのかなどのイメージが掴めないでいる。 ◎　将来ビジョンはそもそもイメージであり、掴みどころのないものではある。市民が、「こうなったらいいよね」というイメージを共有するものである。 ○　あまりに漠然としたイメージだと、多摩市らしい将来ビジョンにはならない。だからといって、具体的に表現しても将来ビジョンにならない。表現の仕方が難しい。

次第４ （仮称）多摩市文化芸術将来ビジョン 2035 について	○　多摩市らしさとは、何かと比較し、特徴がある部分である。例えば、多摩市と渋谷区を比較したら、多摩市は圧倒的に緑が多い。市民は日常すぎて当たり前に感じているが、自然が多く、歩道と車道が分離している街はいってみれば舞台である。街中や公園などで、様々な文化芸術を展開できる。劇・美術・音楽・舞踊・合唱などを四季折々の自然の中で実施できる。そこが多摩市らしさではないのか。 ◎　文化芸術の範囲は文化芸術基本法にそって記載しており、市民が将来ビジョンを見たときに、文化芸術とは何を示しているのかを伝えるという意味があるが、記載するべきかどうか、委員の意見を伺いたい。 ○　１０年後に、記載している文化芸術の範囲の種類が増えている可能性がある。なくて良いのではないか。 ○　将来ビジョンを作った時点で、文化芸術というものの共通のベースができる、という意味であった方が良い。例えば、文化芸術基本法も施行日があり、改定した場合はその日付が記載される。そうやって範囲が変わっていくのも良いと思う。 　地域における文化芸術に具体的に「めかい、山王下粉屋踊りなど」が記載しているが、これは欄外にした方が良い。文化芸術基本法には定められておらず、誤解を招く恐れがある。 　アンケート結果などで、めかいや山王下粉屋踊りなどの多摩市ならではの文化を「知らない」という意見があった。原因を考えてみると、外から移り住んだニュータウン地域が、多摩市の大部分を占め、人口も多い。そういう意味では、既存地域から生まれ引き継がれてきた文化があるものの、それが市民に引き継がれていない、ニュータウン地域の人々に知られていない、ということが多摩市らしさ、多摩市の特徴でもある。 　どうやって、多摩市らしい文化芸術を絶やさず、繋げていけるかを考えるのも良いのではないか。 ○　表だけでなく、説明文として「文化芸術基本法に定められた文化芸術は表の通りとなります。その他に、多摩市の郷土文化であるめかい、山王下粉屋踊りなど視野に入れて考えていきます。」と入れるのはどうか。 ○　現時点での文化芸術を記載して、新たな文化芸術をどんどん追加していくと、わかりづらくなってしまうのではないか。分野だけを記載して、内容は記載しない方法はどうか。 ◎　様々なアーティストから、文化芸術基本法の文化芸術の範囲について、疑問が出ている。そういった意味では、分野程度に留めて、多摩市の郷土文化やこれから生まれる新しい文化芸術も対象とする、と記載する考え方もある。 　また、あくまでも文化芸術基本法は参考程度にし、文章で説明するに留める考え方もある。 ○　文化芸術基本法の定める範囲は広範囲だが、本当に全て対象とし発展させていけるのか。

次第４ （仮称）多摩市文化芸術将来ビジョン 2035 について	◎　ビジョンではあらゆる文化芸術を排除しないという意味でなるだけ広範囲にあげておくが、計画では的を絞って施策を考えていく必要がある。 ○　全てを対象にして施策を考えることは難しい。 ○　文化芸術というと、人によってイメージするものが違う。絵画をイメージする人、音楽をイメージする人、演劇をイメージする人など。文化芸術の範囲を示したからといって、全てを振興するのではなく、人によって違う様々な文化芸術のイメージを「こういうものも文化芸術としていますよ」と伝える意味で、「参考としています」と文章で伝えることは必要であると感じている。 ○　コミュニティセンターで活動している人々は、文化芸術基本法で示されている以外の文化も多いが、内容のうしろに「など」があるので、自分の活動がどこに入るのかイメージはしやすい。 ◎　イギリスで行われたある調査では、文化芸術を３つに分類して示している。①公的支援がある文化（制度化された文化）、②市民が日常的に楽しむ文化（分類ができない多様な文化）、③マス文化（商業文化）としている。それら３つを差別しないとしている。 　まとめとしては、将来ビジョンとして、文化芸術基本法を参考としています、と留める方向で進む。 <u>≪５ページについて≫</u> ○　「文化芸術に親しんでいる市民」とあるが、では、文化芸術に親しんでいない市民とはどういった人たちを指すのか。 ●　特定の分野で文化芸術に触れている人たち、または文化芸術に興味がない人たちを指している。 　人々は日常を送る上で、何かしらの文化芸術に触れている。しかし、今までの話し合いの中で多摩市が様々な文化芸術に触れられる街になってほしいとの意見があり、市民も興味のある特定の分野だけに触れるのではなく、多様な文化芸術に親しんでいる市民が増えることが大切との趣旨で目指すべき姿を表現している。 ◎　正確に言うと、文化芸術自体があいまいなので、文化芸術に触れていても、人々はそれを自覚していない。日々触れている文化芸術について、「それは文化芸術ですよ」と言うと、驚く人が多い。 ○　改めて文化芸術基本法の範囲を見ると、自身としてはこの範囲を広げたいとは思わない。仕事で忙しく、多様な文化芸術に触れられる時間を捻出できない。自分の好きなことを優先させてしまう。 　その好きなことは、文化芸術でもスポーツでも良いと思う。 　つまり、衣食住だけでは豊かな生活とは言えないから、衣食住＋α（α は何でも良い）ができる環境の多摩市がやるべきことではないか。

次第４ （仮称）多摩市文化芸術将来ビジョン2035について	○　人々の人生に彩りがあればいいのではないか。彩りとして、文化芸術活動を自分から始める人もいれば、気づけば何かしらの影響を受けて触れている人もいる。そういったきっかけが、街中にあればいいのではないか。 ○　５ページの将来ビジョンの目指すべき姿の内容における背景・決定した理由の文章は、きれいにまとめられているが、何を意味しているのかわかりずらい。 ○　例えば都内で毎年開催されているラ・フォル・ジュルネのような大きなイベントに乗っかるなど、共有ビジョンの案として考えた。概要は、毎年異なるテーマで、朝から晩までいくつもの短いプログラムを気軽にはしごして国内外の一流の演奏を低価格で楽しめる。街中で飲食店を含む多彩なイベントを開催し、赤ちゃんからクラシック通まで気軽に楽しめる。 　こういった企画を定期的に市が率先して実施できれば良いのではないか。定期的に開催することにより地元のお祭りの様に街全体が年々盛り上がっていくと考える。 ◎　音楽だけでなく、美術においても似たような取り組みが可能である。音楽や美術は、街全体を巻き込んで数日開催するイベントに向いている。 　計画づくりの柱にするには向いている内容である。 ○　将来ビジョンの目指すべき姿に、「子どもが小さいうちから文化芸術に触れている」という趣旨も加えたい。 ≪６・７ページについて≫ ○　「乳幼児から触れている」の「子ども達に文化芸術に触れさせること大切さを理解している」を「子ども達が文化芸術に触れることの大切さを理解している」に修正してほしい。 　主体は子どもであるべき。 　さらに、「いきがい・喜びを感じている」の「自身が得意なことを、子ども達や知りたいと思う人々に」の「子ども達」を取るべきである。子供たちも教える側になれるし、大人が教わる側になる場合もある。 ○　６ページ「楽しんでいる」と、７ページ「喜びを感じている」に違いはあるのか。 ◎　将来ビジョンとしてのイメージとして表現している。 ○　「乳幼児」ではなく、「乳幼児期」とした方が良い。正しくは、「乳幼児期から触れている」「子ども達は乳幼児期から文化芸術に参加・体験し、文化芸術に対する興味を深めている。保護者や地域の人々は、子ども達が文化芸術に触れることの大切さを理解している」ではないか。 ○　大人を主体とした文章にした方が良いのではないか。「保護者や地域の人々は、子ども達が文化芸術に触れることの大切さを理解している。そして、文化芸術に触れる機会を提供している。」という趣旨はどうか。

次第４ （仮称）多摩市文化芸術将来ビジョン 2035 について	◎　計画に繋がる表現であることが大切である。 ≪８・９ページについて≫ ○　６ページ「親しんでいる」の解説３行目「趣味で活動している表現活動の担い手から一流のアーティストまで」と、８ページ「触れる」の「趣味として活動している人から本物のアーティストまで」とあるが、一流または本物のアーティストが先にくるべき。 　印象として、趣味で活動している人がメインのように感じる。ワークショップやアンケートでの意見において、一流のアーティストの公演を鑑賞したい、本物を体験したいとの意見が多くあった。アンケート結果に「市民団体の発表の場をプロの公演に置き換えて安価に文化を提供する形にしないほうが良いと思います。」とあったが、その通りだと思っている。 　また、９ページ「支援」はもっと前に置くべきではないか。支援がないと活動できないものがほとんどである。よほど名の知れたアーティストや活動でないと、支援なしで活動できない。 ○　プロからアマチュアまでの順番にするべき。お金はかかるが、一流には人々を引き付ける力がある。１週間、街をあげて実施するイベントなど目玉が１本あり、その他に草の根的な活動としてもっていかないと、柱が立たないのではないか。 　条例を作り、将来ビジョンをつくり、計画も今後考えていく。その計画に繋げていくためには、覚悟をもって目玉となりうるものを考えていっても良いのではないか。 ○　条例名が「みんなの」と入っているため、プロもアマチュアも横並びと思われてしまう。プロを立てるのは大事な視点かもしれない。 ○　求心力のあるパルテノン多摩がある。そこにどういうコンテンツをもってくるか。パルテノン多摩を軸にして本物を体験できる、という柱があっても良いのではないか。 ○　条例について検討する際、文化芸術の経済的効果を議論した。将来ビジョンにおいて、そこは触れられていないが良いのか。 　経済的効果を目的とした文化芸術は反対である。しかし、文化芸術活動を行った上で、結果的に経済効果につながっていくことは、街の活性化には大切である。 　文化芸術活動と経済的効果は両輪であり、順番を間違えなければ大切な視点である。 ○　支援は将来ビジョンではなく、施策の内容となっている。 ○　文化芸術に興味のない人々も多い。そういった人々が文化芸術の振興に理解を示してもらう必要がある。「街が活性化する」と具体的な言葉がないと市民が納得しない。

次第４ （仮称）多摩市文化芸術将来ビジョン2035について	○　何をやったら市民が喜ぶかを考えながら作っていくことが大切だと感じている。 ◎　今回は、将来ビジョンのたたき台を網羅して、何が課題かを抽出し、共有する回となった。意見があったものは、事務局と検討し、次回の議論に繋げていきたい。
次第５ 第５回委員会について	日時：令和５年４月２６日（水）１８時～２０時、３０１会議室